

結 章

観光サバルタンの実践の把握へ



本研究は、ここまで、序言で議論の起点を示し、序章で主題や問題枠組みを画定したのち、4つの章からなる具体的トピックについて論述を重ねてきた。周縁観光論の試みは、以上に尽きるものではなく、さらなる議論に開かれている。ただし、それは終わりが無いものでもある。そこで、いったんここで議論を締めることにしよう。

ただし、ひとつ論じておかなければならない課題が残っている。序章第4節で「適切さに欠ける」と述べた表記の再検討である。ホスト側たる観光事業者のみならず、ゲスト側たる観光者をも含めた観光の主体が、多重のリスクに巻き込まれ生きていることを主題化する「観光リスク論的観点」に立った場合、周縁的な存在を含めた観光の諸主体はいかに捉えられるべきなのか。本章では、その検討作業を、これまでの民族誌的記述を振り返りながら、ホストとゲストという概念枠組みを批判的に考察する立場から行うことにしたい。

第1節 ホスト&ゲスト論をこえて

従来の人類学的観光研究においては、ホストとゲスト、あるいはこれらを媒介するミドルマン(第I章第5節第4項)といった概念によって、観光主体が捉えられてきた(ex. 岩原 2020: 23-33; Smith (ed.) 2018a(1989); Smith & Brent (ed.) 2001)。そうした枠組みが無効になったわけでは、もちろんない。しかし、第I章で取り上げた『ホスト・アンド・ゲスト』の議論が想定していた状況とは異なり、現代観光においては、ホストとゲストの立場は固定化したものではなく容易に入れ替わるものとなっている。たとえば、ゲストがホスト化し観光を支え、ホストがゲストとなって他の観光地を訪れ学び、ホストとしての事業を更新するといった事態は、バリや沖縄のみならず世界各地で観察しうる。第IV章で触れた現代人のホームとアウェイの境界の液状化は、ホームを出発してアウェイの地に向かうゲストと、そうしたゲストを自身のホームで迎え入れるホストという、スミスの設定した理論的枠組みの液状化という問題に、論理必然的に波及するのである。

その第IV章の議論は、ホスト化する元ゲストにもっぱら着目しながら、ホストとゲストの相互転換性や両者を分かち境界の可塑性・流動性を、事例の記述を通して明らかにしようとするものであった。では、それ以前の章は、観光主体という論点についていかなる事実を提示するものであったのだろうか。あらためて振り返ってみれば、第II章の議論は、行政側が観光地化されてよい範囲を設定し、そこで地元の人々が一定のルールにしたがって観光者を迎え入れるホスト役となることが期待されるものの、そうした観光地化の制度やルールの初期設定に、ゲストと直接接触するホストたるはずの人々が主体的に関与する余地がなかったという——その点では、観光主体という観点からも逸脱例といえるかもしれない——事例を取り上げるものであった。また、第III章の議論は、観光者を迎え入れることに否定的であったいわば「反ホスト」的存在が、出来事の連鎖の中で認識を更新し、ホスト的主体へと自己を転換ないし反転させていく過程を取り上げるものであった。このように、これら2つの章はそれぞれ、ホストたるべき地元の人々の非関与性と、観光者の受け入れに否定的な反ホストのホストへの反転について、論じるものであったといえる。ホストとゲストの相互転換性や境界流動性を論じた第IV章や、観光の定義の再検討を主題とする中でホストやゲストの内部の差異に論及した第I章も含め、本研究の各章の議論は、各々の切り口から、ホストとゲストといういささか単純な枠組みには還元できない現代観光の主体の複雑なあり方を主題化し記述しようとするものであったと、総括することができる。

第I章第4節では、加太がある契機を境に人は観光者になると指摘したことに触れた。これを敷衍していえば、人はある契機にホストやゲストになるということにすぎない。ホストやゲストは、

いわば相互規定的な役割関係を示す、表層的といってよい指標であって、観光に関わる主体の実質的性格をいい当てた概念ではない。すくなくとも、前章までの周縁的な観光現象に関する記述と考察からは、観光をホストやゲストそしてミドルマンなどが織り成す相互作用的行為現象として定式化することだけでは、現代観光における多様な観光主体の特徴や彼らの関与のあり方の内実を十分に把握することはできない、という点を導くことができる¹。そのこともあって、本研究では、「ホスト側」「ゲスト側」というややあいまいにも受け取れる表現をあえてもちいてきたのである。

この多様な観光主体という点でとくに注目すべきは、第IV章のN氏である。N氏は、ホスト／ゲストという観光実践の主体としても、またウブドで暮らす移住者としても、周縁的あるいはむしろ外縁に近いといってよい存在である。しかし、第IV章の議論において周縁的な事例であったこのN氏に、ここであらためて焦点を当てる必要がある。彼や、第IV章第3節第7項で補足的に触れた人々を含め、本研究では、ホストやゲストとして観光実践に十全なかたちで関与できない／できなくなった人々の存在状態に、一定の目配りをしてきた。序章第4節では、こうしたタイプの人々を、決して適切な表現とはいえないものの、暫定的に「観光弱者」や「観光下降者」と表記した。彼らは、十全なホストやゲストやミドルマンではないため、そうした既存の概念によってはうまくすくい上げることができない存在である。ホスト側における彼ら周縁的存在に着目した先行研究はあったが（第I章第3節第3項）、ゲスト側をも含めたところで、そうした弱い立場の人々が観光の発展や膨張の中で必然的に生み出されているという点は、先行研究において十分明確に主題化されてこなかった。別言すれば、彼らは、既存の観光研究において捕捉される準拠枠を欠いた、半ば不可視の存在であったといつてよい。しかし、周縁観光論の立場からすれば、こうしたタイプの人々をこそ、観光の議論に組み込み、適切な術語によって把握すべきである。

以上のように、ホストやゲストといった主体概念に依拠して現代観光を捉えることには一定の限界がある。とりわけN氏らのような周縁的存在をも射程の範囲に収めて現代観光を把握するためには、ホストやゲストなどとは異なるオルタナティブな理念型が必要である。それは、観光リスクあるいは世界社会が抱える種々のリスクの顕在化に翻弄されそのダメージを受け、観光という社会的行為の交差するアリーナから撤退せざるをえない、あるいはそこに入れない、弱い立場の存在を、ホスト側のみならずゲスト側をも含めて捉えうる概念でなくてはならない。

ここまでの民族誌的記述とその整理を経てようやく、そうした周縁的で脆弱な観光主体を捕捉する適切な概念枠組みについて論じる準備が整ったと考える。私は、序章の「観光弱者」や「観光下降者」に代わるものとして、「観光サバルタン」という概念を提起したい。以下、グラムシの議論を手掛かりに、若干の理論的整理を行うことにしよう。

第2節 観光サバルタンについて

序章第1節では「観光地支配」に触れた。観光地には、全体的社会事実としての植民地状況に類似する、一方的な社会・文化の改編と支配体制の浸潤があり、この支配体制は大衆観光時代以降にさらに強度を増しグローバルに拡大した、と考えられる。ここでの「支配」は、序言・序章で触れ

¹ 先行研究において、通訳、ガイド、旅行会社や運輸会社、NGOなどのエージェンツ的の主体は、ホストとゲストの間を媒介・仲介するミドルマン的存在とみなされてきた。しかし、彼らは、観光者を迎え入れる現地のホスト側のまなざしからは、自らとは異質な外部の存在として捉えられ、逆にゲスト側のまなざしからは、やはり自らとは異質な、むしろホスト側に属するものとして捉えられる存在である。ミドルマンという両義的・境界的な範疇もまた、ホストとゲストの枠組みとともに、いったん解体されてよいのかもしれない。

たように、フーコーに依拠した概念である。フーコーは、支配や権力を、中心や上位にある組織や人が下々の組織や人々に強制的・外在的に行使するものとしてではなく、それが強制力をもつかどうかも意識されないようなかたちで、日常の何気ない生活の中に毛細血管のように隅々に行き渡り、主体が自ら進んで受け入れもするものとして、捉えた。観光地支配は、この人を生かす生権力に支えられたひとつの装置にほかならない (Agamben 2001 (1998), 2003 (1995), 2016 (2014); Foucault 1986 (1976), 2006 (1979): 190; 檜垣 (編) 2011; 市野川 2016; 久保 2018: 160–178; 三上 2010: 37–38; Negri & Hardt 2012 (2009): 139; 吉田 2020a: 107–109, 139–145, 2022a (2018): 18)。

観光地支配は、散逸的・局所的であって、かならずしもつねに可視的なものではない。第 I 章第 3 節で触れたように、観光者つまりゲストや、彼らを受け入れるホストは、自らを観光実践のまっただけの主体であると自己観察しているかもしれないが、他方で、彼らはこの支配のメカニズムに従属させられている存在であるとも観察しうる。「観光サバルタン」は、こうした観光地支配のメカニズムに従属する主体を指す概念である。したがって、観光事業の成功者や、世界中の観光地を飛び回って余暇を享受する裕福な観光者であっても、観光地支配のメカニズムに従属しこれに拘束されている——それゆえ、その従属性や被拘束性をなかなか自己観察できない——のであれば、観光サバルタンとして捉えうる。アジア諸社会における遺産保全について論じたバーンは、非西欧諸社会がサバルタンの地位にあると述べるが (Byrne 2019: 205)、西欧諸社会やそこに帰属する人々がここでいう観光サバルタンの地位から免れているというわけでは決してない。重要なのは、この概念によって、観光という社会現象に関与する主体の従属性や脆弱性にあらためて光を当てることである。

理論的背景に触れておこう。サバルタンの概念は、スピヴァクのポストコロナル研究を通して人口に膾炙した。しかし、本研究が依拠するのはアントニオ・グラムシの議論である。『獄中ノート』の「歴史の周縁 (サバルタン社会集団の歴史)」(ノート 25) において²、グラムシは、奴隷、農民、宗教集団、女性、異種族、プロレタリアートをサバルタン (subalterns) に包括した。ただし、彼はこの概念を明確に定義づけることはしなかった。それは、彼が、それら異質な諸集団の従属性や被支配・抑圧の状況の具体的で多様なあり方に注意を払っていたからである。付言すれば、獄中の不健康かつ不自由な身で推敲を重ねた彼自身もサバルタンであったと考えてよい。松田にしたがえば、グラムシのサバルタン論のポイントは 3 点に整理できる。①サバルタン諸集団は、つねに支配的諸集団のイニシアティブの下におかれ、不安定で受動的である。②その従属性 (サバルタン性) からの脱却をもとめて反乱や蜂起を起こしても、支配的諸集団によりその抵抗が破砕されることはおおく、サバルタン社会集団の歴史は必然的に断片的かつエピソード的である。③だからこそ、サバルタン集団の歴史すなわちそのイニシアティブの痕跡を捉えることが、歴史家にとって価値を有する。サバルタンの歴史は、収集が困難な大量の資料に支えられたモノグラフあるいは史誌 (storiografia) によってしか扱えない (Crehan 2016: 3–17, 185–186; Gramsci 2011d (2009/1975/1934): 16–30, 31–34, 51–65, 2021 (1975/1934–1935); Green 2011 (2002): 69, 78–81, 2021; 松田 2007: 83–99, 2011a: 12–13, 2011b: 153–155, 2021: 155–158; cf. Cadeddu 2020; Hobsbawm 1989 (1971/1959): 125–

2 『獄中ノート』は、出版を意図せず何度も推敲を重ねた断片的・断章的な探究途上の記述の束であり、グラムシの死によって終結した。グリーンは、スピヴァクらを含む英語圏の研究者が、1971年に出版された『獄中ノート選集』(Gramsci 2018 (1971)) にもとづいてグラムシのサバルタン概念を捉えているため、誤読や不適切な理解をしていると指摘する。なお、「ノート 25」は、グラムシの病状が悪化してから執筆された 8 篇の未完の草稿であり、その主たる内容は「ノート 3」の第 14 草稿「支配階級の歴史とサバルタン諸階級の歴史」に加筆したものである (Crehan 2016: ix, 4; Frégné 2021; Gramsci 2011a (1992), 2011b (1996): 21, 2011c (2007), 2011d (2009/1975/1934): 32, 2021 (1975/1934–1935); Green 2011 (2002): 68–69, 81, 2021; Hoare & Sperber 2016: 20–23; 松田 2007: 18–19, 83–86, 2011a: 11, 2011b: 174, 2021: 32–35, 147–152; Ruccio 2011 (2006); 鈴木 2011: vi, 18–19, 24–25; Zene 2011 (2011): 90)。

153)。

史的唯物論の立場に立つグラムシは、理論と実践とを総合した「実践の哲学」を志向し、歴史的
事実の叙述と考察を重視した。たとえば、「ノート3」の「過去と現在（自発性と意識的リーダー
シップ）」という表題の第48草稿には「現実を決して抽象的な図式に合致しない」という記述があり、
理論よりも事実を基盤に据える彼の認識を、ここに看取することができる。グリーンやクレハンらが
指摘するように、グラムシのいうサバルタン諸集団は、従属性や自律性の程度やレベルを異にする
相当な広がりの中にある。たとえば、ある都市部のプロレタリアートとある農村部の農民とを対比す
れば、前者の方が自らのサバルタン性により意識的であり、集団性・組織性においてより強固であ
りうる。逆に、後者はより非組織的で受動的であり、それゆえその抵抗が結実することもすくなく、
その記憶や記録もより残りにくい。サバルタンの中には、史誌に痕跡を残さない「周縁的」な集団
から、「進歩的」で歴史に名を刻む集団まであり、決してひと括りにできない差異をもつ。それゆえ、
グラムシは、その差異を書き留める史誌／民族誌を、つまりはギアツがいう「厚い記述」を、重視
したのである (Buttigieg 2011 (1992): 48–49; Crehan 2016: 10–17, 185–188; Gramsci 2011b (1996): 48–52;
Green 2011 (2002): 74–80; Hoare & Sperber 2016: 114–116; 鈴木 2011: 19; cf. Geertz 1987 (1973))。この
ように、グラムシのサバルタン論は、周縁的な観光現象の記述を重視する本研究の視点と親和的で
ある。

これにたいして、スピヴァクのサバルタン論は、グーハの議論を抛り所にしつつ、南アジアの植
民地支配・カースト支配の下にある人々を、フーコーやデリダを批判する思想的文脈において論じ
たものである。グーハやスピヴァクは、グラムシの思索の基盤となったイタリアや西欧と、植民地
支配下のインドやアジアとの間にある支配や権力の差異に十分自覚的であり、当初はグラムシのサ
バルタン論に寄り添う立場を採っていた。しかし、スピヴァクは、自ら語りえない従属的な被支配
者集団を「真の」サバルタンと定義づけ、語る表象性を自ら獲得し従属的地位から脱却しうるエ
リート・サバルタンを「逸脱態」と位置づけるようになった。サバルタンは語りえず、組織的に結
集しえず、支配者集団に勝つことができない、というのである。しかし、サバルタンをエリートの
対極にある存在へと切り詰め、かつ静態論的に捉えるスピヴァクの理解は、サバルタンの多様性と
彼らの一部が勝利し従属性を打破する未来の可能性を視野に入れた動態論的なグラムシの理解と、
あまりに対照的である。また、グーハやスピヴァクの議論は、支配者集団であった植民地政府側の
記録に依拠しており、史誌の事実性や文脈性を批判的に考察する観点をやや欠いてもいた (Crehan
2002: 123–127, 2016: 14; Green 2011 (2002): 81–88, 2021; 松田 2007: 85, 130–136, 2011b: 153; Spivak
1998a (1988): 37–40, 1998b (1985), 1999 (1996/1993): 81; Zene 2011 (2011): 91–93, 103)。

私は、サバルタン概念を、スピヴァクらのポストコロニアル研究の文脈からグラムシ的なモノグ
ラフ研究の文脈へと差し戻すとともに、政治的のみならず、文化的・社会的・経済的・地政学的等
の広い意味で従属し支配される弱い立場の人々の生に注目する立場から、これを観光研究へと適用
したいと考える。それが「観光サバルタン」の概念である。

観光サバルタンは、観光地支配のヘゲモニー構造に取り込まれ、そこに従属する多様な人々を内
包する。序章第1節で言及した、経済的・生態学的・社会的な脆弱性にさらされる小規模観光事業
者、観光地化による恩恵を十分享受できない観光業従事者、当該観光地の衰退やその危機に直面し
未来への不安をもって生きる観光地社会の人々、観光という行為を思う存分享受したくとも十分
には果たせない、観光者と非観光者との境界に位置する人々、第I章第3節で言及した、義務的支出
を捻出しながら義務的消費行為としての観光を子どものために実践する親たち、第III章で取り上
げた、沖縄地上戦における〈死の声〉を伝えてきたひめゆりなどの学徒隊生存者たち、あるいは、世

界自然遺産観光においてホスト役を務めることが期待されながらも基地問題やオーバーツーリズムがもたらす生活環境の変化に不安を覚える人々、バリでの移住生活を思い描いたり実行したりしながらも結果的に日本に撤退せざるをえなかった人々、さらには、ホストやゲストとして観光実践のまったき主体であると自己観察しているものの、別の観察からは観光地支配の呪力に緊縛されていると受け取れる人々、観光依存症的消費行為を繰り返す人々、それらさまざまな主体を、観光サバルタンとして捉えることができる。ホストとゲストは非恒常的なひとつの役割関係と考えてよいが、観光業を営むホスト側の中にも強者と弱者、上昇者と下降者とがおり、ゲスト側の中にも強者と弱者、上昇者と下降者とがおり、こうした格差と地位移動および嗜好・志向の差異は、産業資本主義体制の中に係留されている観光という社会現象の膨張・発展とともに、またコロナ禍における世界的な観光業の停滞や混乱によっても、いっそう顕著になり複雑化・液状化していると考えられる (cf. 斎藤 2023: 226–227)。

本研究は、いくつかのトピックに焦点を当てながら、周縁的な観光現象を記述し把握することを主題に据えた。しかし、観光サバルタンの具体的なあり方を十分詳細に書き留めるにはいたらず、まさに断片的な記述にとどまった。過去ではなく現在の民族誌的記述を基盤とした研究では、彼らについてどこまで詳細に記述することが適切なのかという研究倫理上の問題を慎重に考慮する必要もある。ただ、以上の議論から、さらなる探究へと向かうための道標として、さしあたり3つの論点を抽出することはできる。

第1点は、これまでホストやゲストなどの概念によって括られ捉えられてきた、観光の「中心」に位置する諸主体が有するサバルタン性やその差異的あり方をあらためて浮き彫りにする検討に着手することである。それは、今後の人類学的観光研究が取り組むべき重要な議論方向性であろう。

第2点は、グラムシのサバルタン論に修正や追記を施す理論的考察を展開することである。もっとも重要なのは、グラムシの描く「支配」や「権力」をフーコー的観点から組み換える作業である。グラムシの議論は、支配的集団とこれに従属するサバルタン集団という二項対立と、前者の支配に抵抗しそこからの解放をもとめて立ち上がる後者と前者との闘争という議論枠組みにもとづいていた。しかし、フーコーの支配概念や権力論を導入すれば、支配の枠組みから免れているといえる集団はそもそも存在せず、権力は被支配者層もが進んで受け入れ社会の隅々に浸潤するものと捉えられる。また、サバルタン集団が対峙する支配的集団もサバルタン性を宿していたり、逆にサバルタン集団の中に支配者集団へと転換する芽もまた宿っていたりする、と考えなければならない。別の角度から述べれば、サバルタン集団を支配し、その反乱や蜂起を破砕するのは、特定の支配的集団というよりも、むしろサバルタンをも含む諸集団が織りなす社会関係メカニズム、つまりはフーコーのいう装置、あるいはルーマンのいう社会システムである、とみなすべきである。さらにいえば、当該の支配者集団がある時代のある歴史的局面において支配する側を担うことの偶有性に目を向けたり、グラムシが重視する史誌の叙述がもつ理論的契機をグレーバーがいう「低理論」に重ねて検討したりする可能性も (Graeber 2006(2004): 44)、考究されてよい。そうした理論的定式化の当否やその実践的弊害の如何を、思弁的ではなく事実即して厳しく吟味することが、今後の課題となる (Çakmak, Tucker & Hollinshead 2021: 6–7; Daldal 2014; Kreps (ed.) 2017(2015))。

ただ、いずれにせよ、もっとも肝要なのは、モノグラフ／史誌つまりは民族誌的記述のさらなる蓄積である。これが第3点である。本研究は、理論と一体となった民族誌的記述を一定範囲で行うとともに、グラムシによる考究から若干の跳躍を試みて、観光サバルタンが関わる周縁的現象の探究、より適切な表現をすれば、諸観光サバルタンが実践する周縁的観光現象の理論的かつ民族誌的探究の、端緒を開示したところまで、となる。

第3節 観光研究の観光化へ

以上の観光サバルタンをめぐる議論の中で、本研究の論じた主要な論点はすでに言及できていると考える。最後に、あらためて全体の総括として3つの点を再確認しておきたい。

第1点は、グラムシが史誌や事実の重視に込めたように、また序章で「観光現象学」と呼んだように、人類学的観光研究の生命線は、民族誌的記述を通して「事象そのもの」に向かい合うことにある、という点である。本研究は、こうした目論見のもと、「観光」概念を定義し確定することをあえて保留しつつ、現代観光における周縁的な事象の記述に向かうという議論方向性を選択した。拙書（吉田 2013b）では、既存の観光研究の議論枠組みの基盤を問い直す「反観光論」の可能性を、楽園観光を主題に論じたが、本研究もまた現代観光を主題とした、別種の反観光論の試みであった。

第2点は、今後、観光研究は、観光が孕むリスクにより真摯に向かい合う必要があるという点である。従来の観光研究の大半は、観光振興や観光の発展のよりよきあり方を主題化しようとする議論枠組みの上にあった。そうした議論の可能性を否定するつもりはまったくないが、すくなくともその種の議論の前提が、コロナウイルスによって突き崩されたといえることは、確認しておかなければならない。「世界リスク社会」のグローバルな社会・経済・環境のメカニズムの中に他力本願的構造をもって肥大化し膨張した観光は、途方もない高リスク性や不確定性をもった産業編成体であり社会現象である。このことを、理論研究において突き詰め、民族誌的研究において具体的に把握し、それらを社会の中に共有化していくことが重要である。コロナ禍を抜け出たあとも、観光リスクの顕在化は何度も訪れるであろう。コロナ禍は、アーリらが楽観的に語るのとは異なる、実質的な「観光の終焉」を垣間見せるとともに、観光のリスク論的研究とそれを踏まえた社会的対処の必要性をわれわれに知らしめる一大契機となった。今後、観光研究は、リスク論的転回という抜本的なパラダイム転換に向かうべきなのである（吉田 2021a）。

では、その場合の「観光」とは何であろうか。第1章の冒頭では、暫定的に、「観光」という語を、ホスト側とゲスト側の関与の両面から成り立つ社会的行為、およびこの社会的行為の集合体としての社会現象を指すものと捉えて議論を出発させた。しかし、この結章で示したように、こと現代観光に関しては、こうしたホストとゲストからなる観光現象という理解枠組みはかならずしも十分なものではない。また、今後の観光研究は、リスク論的なパラダイム転換を経由しつつ、また支配や生権力の介在を重視するフーコー・グラムシ的な視点を取り入れつつ、更新されていくべきものと考えられる。こうした本研究のたどり着いた結論を受けて、人類学的観光研究において意味ある「観光」概念とはいかなるものと理解すべきであろうか。これが第3点である。

本研究では、ホームからアウェイへと観光者が移動し、何らかの経験・知見を得ることが「観光」であるという既存の理解にたいして、ホームとアウェイ、移動と定着、そしてホスト（観光事業者）とゲスト（観光者）とが融解しているのが現代であり、これらの概念を固定的な意味で捉えてはいけぬ、という点を強調した。これを踏まえて、次のようにいうことができる。人類学的観光研究は、民族誌的記述を通して、観光研究のいまある内部にとどまるのではなく、その外部へと果敢にこえていこうとすべきものである、ただしその主張を決して固定的な意味で捉えてはいけぬ、と。

この研究という文脈を取り外して、「観光」それ自体が何であるかという問いの答えを縮約した表現に還元することはできない。それは第1章で論じ、後続の章で確認してきたとおりである。ただ、人類学的観光研究が何であるかについては、いま述べたような抽象化や縮約化を含意させることは可能である、と私は考える。今後、人類学的観光研究は、この意味での観光研究の「観光」化

——いまあるところの外へと、さらには地平の彼方へと、こえ出ようとする——をより高めていくことによって、観光という具体的な社会的事実の探究を超えたところで、ある種の普遍的な意義をもつものへと自己を更新させる不断の営みであるべきである。もっとも、単純に、それは「観光研究」にとどまらない「人類学的研究」のあるべき姿にほかならないが。

本研究では、縮約した短い概念定義に還元することを避けつつ、現代観光における周縁的な民族誌的事実に着目した記述と考察を積み重ねてきた。ゲリラ戦的な手法を採った周縁観光論という本研究の試みは、この人類学的観光研究の観光化、あるいはカント的な意味で「超越論的」たらしとする観光研究の、ひとつのかたちにすぎない。本研究が観光研究の観光化に向かうささやかな一歩となることを祈念しつつ、ここで周縁観光論という試みの筆をいったん擱くことにしよう。